



四万十町  
町内「ぶら〜り」散策

# 中ノ越

なかのこえ

仁井田川と東又川の合流地点の西岸に中ノ越地区がある。先月号の小向地区からは仁井田川を挟んだ南西側。向川地区からは北西側にあたる。中ノ越地区の西側には小山が連なり、この山を越えると平串である。

現在の中ノ越地区の静寂からは想像しづらいが、古くはこのあたりは人の往来がたいへん盛んであった。現在のように国道や鉄道が整備される前までは、ここが県(藩)西部から中央へ上る重要な街道であった。

中ノ越の西方の山の頂近くには中ノ越城跡がある。この城は、戦国期1536年に、当時の土佐の国西部を支配していた一条氏が、その家臣であった安並城主・安並左京進に与えたものであるという。それから38年後の天正二年(1574年)土佐一条氏6代当主・一条内政が、中村から長岡郡大津城に移るにあたりこの城に立ち寄った。その際、仁井田五人衆など近隣の城主たちが集まり、歌を詠んだり、にぎやかな宴が一晚中催されたと伝えられている。

余談であるが、この一条内政という人は、長宗我部元親の娘を正室に迎えている。このことで、一条氏は元親の傀儡ではなかったかという説がある。というのも、当時は織田信長による天下統一が着々と進みつつある頃で、信長は自分の思いのままにな



地区の氏神様である音無神社

らない元親よりも、一条氏を土佐の支配者として操ろうとした節があり、そういった信長の意図を読み取った元親が内政を警戒し、取り込んでおきたかったのではないかというのである。事実、この宴から6年後(7年後という説もある)内政は、元親への謀反に加わったとして伊予に追放され、その後病死したとも毒殺されたともいわれる。

さて、江戸期に入ると中ノ越は、土佐藩家老・窪川山内氏の支配下になる。江戸中期の記録では戸数19、人口81とあり、かなりの数の村人が暮らしていたようである。さらに、向川と並んで牛や馬の保有率が高く、有畜複合型の農村であったことがうかがえる。また、明治初期の廃仏希釈が起ころまでは、西福寺というお寺があった。

中ノ越には現在、3世帯9人が暮らしている。

町のうごき	(9月30日)				適正值(mg/l)			
	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出	リン酸	10月1日
男	8,451	-16	男 4	14	6	12	≤ 1.0	測定範囲以下
女	9,443	-3	女 3	14	18	10	≤ 0.5	測定範囲以下
計	17,894	-19	計 7	28	24	22	≤ 5.0	測定範囲以下
世帯数	8,636	-7	(9月中の届出)				≤ 1.0	0.70
窪川地域	12,541人	大正地域	2,564人	十和地域	2,789人	化学的酸素要求量	≤ 10.0	4.929

調査：大正(吾川)  
資料：四万十高校自然環境部